東海大学健康科学部
紀要第4号1998

自閉症の人々にみられる愛着行動とコミュニケーション発達援助について

小林　隆児*

Attachment Behavior in People with Autism and Therapeutic Approach to Promote Communication with them

Ryuji KOBAYASHI

自閉症の人々にみられる対人関係障害を愛着形成の障害として捉え、どうすれば彼らの愛着行動が促進され、他者との間でコミュニケーションが発達していくかを論じた。最初に彼らの愛着形成障害の原因として接近回避動因的葛藤が存在することを、具体的に強度行動障害を合併した自閉症の成人例2例を提示して説明した。ついで彼らの接近回避動因的葛藤を緩和するために、彼らの行動の背後に存在する動因（意図）を感じ取ることの重要性を指摘した。そうした接近によって彼らの愛着行動を引き出すことが可能であること、それを契機に情動的コミュニケーションが深化していくことを示した。情動的コミュニケーションの進展においては、まずもって療育者の積極的関与、すなわち療育者の側からコミュニケーションの枠組みを作っていくことが大切であること、それによって次第に彼らも療育者の意図を察知するようになり、次第にやりとり構造というコミュニケーションの形態を示していくことを論じた。

key words：愛着行動、相貌的知覚、自閉症、情動的コミュニケーション、無様式知覚、力動感(vitality affect)

I　はじめに

福祉施設の利用者の人々の実態を私なりにみていますと、容易に理解できないとか関係がとりにくいといった利用者の人々が多いという印象を持ちますし、実際いろいろな施設職員の方々にお会いすると異口同音に同じようなことを話されます。どうしてかわからないが、関係のとりにくい人達が増えているという現場の実感があるようです。それはなぜなのでしょうか。対象となっている利用者の人々だけの問題なのか、それとも私達自身の人との関係のあり方も関係しているのでしょうか。おそらく私は双方の問題があるだろうと考えています。

今日は「愛着」ということをキーワードにお話しようと思っています。「愛着」という言葉を用いることに対して、かなりの人がアレルギー反応をおこします。なぜ「愛着」という言葉が嫌悪されるのかと言いますと、それはこれまでの自閉症研究の歴史から生まれてきたものといっていいでしょう。今日自閉症という障害は脳障害を基盤にもつ障害であると、多くの人々に信じられています。数十年前までは環境、すなわち育て方の問題だと言われていました。恐らくは愛着という用語がなぜか親の子育ての問題を連想させ、そのことに対する強い抵抗感を呼び覚ますのではないかと思われるのです。この半世紀あまりのわずかの期間に自閉症の原因をめぐる考え方は、大きく変化してきました。まるで振り子が左右に振れるように大転換が起こっていったわけです。

確かにかなりの例で脳に何らかの障害を想定せざるをえない所見が見出されています。しかし、残念ながらこれまで世界中で実に膨大な生物学的研究が蓄積されながらも、いまだ自閉症の病態をもたらすような脳障害の部位は特定化されていません。自閉的といわれる子どもの数はいまでは精神遅滞の数とさほど変わらないのではないかとまでいわれるほど一般的なものであることがわかってきました。脳障害を想定する場合に十分に認識しておかなければならないことは、なんらかの脳障害が把握

＊東海大学　健康科学部　社会福祉学科

されたとしてもそれが原因なのか、単に結果の産物なのかを見極める必要があるということです。

生まれた時はなんら問題のない状態であったとしても、その後狼に育てられるといったほとんど人間と接しない環境に置かれたり、ある感覚遮断の状態に置かれたりすると、脳そのものの機能にも異常が起こってきます。このように脳という器官は環境との相互作用で不断に変化し、成熟していくと考えられています。従って生まれもって問題がなくても環境条件によっては容易におかしくなることがありうると考えなくてはなりません。このことは神経学の領域ではいまや常識となりつつあります。もちろん、生まれた時に何らかの脳の障害を持っている場合には、当然むずかしい問題がいろいろと起こってくることが少なくありません。

したがって、自閉症と脳の問題を考える際には、さまざまなバリエーションを想定する必要があります。生れもって何らかの弱さ（生物学的脆弱性）を持って生まれた人もいれば、基本的には問題ない状況で生まれても環境的に好ましい刺激を得られないで育った場合は、結果として双方ともに脳そのものも十分成熟しないで偏りが出てくる可能性が生じます。このようなことを私たちは念頭に入れておかなければならない。結果だけを見てそれまでのプロセスを論じないとすると、それは時に本末転倒の結論が導き出される可能性さえ生まれましょう。

II　自閉症ではなぜ愛着形成が困難か

1．自閉症と愛着行動

ここでは自閉症研究の原点に戻ってみたいと思います。自閉症というものが原点ではどういうふうに言われていたのでしょうか。カナー Kanner という児童精神科医は当初、情緒的接触の自閉性障害 autistic disturbance of affective contact と命名しました。その用語に示されているように、他者と情緒的接触がうまくとれない、心のつながりがとれないという障害を先天的に持っている子どもたちであると彼は考えたわけです。言葉を換えて言えば、愛着とでも言えるような心のつながりが他者と持てないとみなしたわけです。

愛着すなわちアタッチメント attachment という用語はボルビー Bowlby が使い始めました。ボルビーは精神分析学者でしたが、精神分析学ができるだけより一般の科学とのつながりを持つ必要性を感じていた彼は、動物行動学の概念を取り入れてより中立的にとらえることによって関連領域とのつながりを深めようという意図で、アタッチメントという言葉を用いました。

これは人間発達研究の領域において極めて重要な概念で、現在世界中でさまざまな領域の人達がアタッチメントに関して実に膨大な研究をしています。なぜアタッチメントに着目しているかといいますと、現代は人類が危機的状況に置かれているからだと思います。今日わが国でも虐待がセンセーショナルに取り上げられていますが、虐待というのはまさにアタッチメントの問題でもあるわけです。人間が本来は基本的に持っている子育てをするという本能行動が損なわれてしまっている。そいう危機感が多くの人たちをアタッチメントの研究に向かわせているのではないかと思います。

ボルビーは、アタッチメントというのは人間ないし動物が特定の個体に対して持つ情愛的な絆と定義しています。分かりやすく言うと、人間や動物が心細くなる状況に置かれると何か安心を求めて行動をおこすわけです。誰かのそばに近づく。その人のそばにいると安心できる。そういう安心できる存在を求める行動を愛着行動、そういう関係の質を愛着と言うわけです。具体的にそういう人同士の関係を愛着関係と言っています。このような愛着関係、愛着行動についての研究は、自閉症の分野でも、一部の人によってなされています。もともと自閉症という障害は人との間に愛着関係が持てないということで自閉症と言われはじめたともいうことができましょう。

2．自閉症の愛着行動と接近回避動因的葛藤

しかし、最近になって行動面だけでみると自閉症にも愛着行動が認められることが国際的にも言われるようになってきました。私も確かにそういう面があると思いますが、好ましい愛着が形成できないことに問題があると思っています。なぜ自閉症では愛着形成がむずかしいのかについてこれからお話をしようと思います。

私は最年少の0歳から最年長では30代－40代の自閉症と診断される、あるはリスクを持つ人とつきあってきましたが、親と子の関係を見ていると新しい発見を多々します。母と子の関係がどのようなことで変化するのか見ていると、初期の段階で共通して見られるのは愛着をめぐる問題です。

これからは図を示しながら分かりやすくお話したいと思います。彼らの愛着を巡る問題にはどのような問題が特徴的なのでしょうか。たとえば1歳過ぎの自閉症のリスクをもつ子どもと親が遊んでいる場面で見かけた例をお話しましょう。子どもはにこにこしていて一見何でもないように見えますが、ある時にこにこしながら親の方に近づいて行くのですが、親がおいでと誘い掛けると、

東海大学健康科学部
紀要第4号1998

親の直前で方向転換して逃げてしまうということがありました。乳児のケースを見ていても同じようなことを発見することができます。ある自閉症のリスクを持った乳児が母親に抱かれていたのですが、母親がおんぶをするとのけぞったり、抱っこすると半身の姿勢をとったり、自分の腕を母親の胸と自分の胸の間に入れて密着を避けるといった行動をとることが少なくないことに気づきました。

これらの行動はアタッチメントをめぐって彼らが葛藤を起こしている状態を示しているのだろうと思われます。このような葛藤状態をリッチャー Richer は接近・回避動因的葛藤 approach-aviodance motivational conflict と称しました。図1がその特徴を示しています。横軸は親と子の物理的距離を表しています。人間や動物は愛着を求めて、慰めてもらいたい、よしよししてもらいたい、その人のそばにいくと安心するとか、離れると接近したいという気持ちが高まってきます。しかし、葛藤の強い状態にある人では、ある程度その人に近づくと、次第に緊張が高まってきて今度は離れたいという気持ちが高まっていきます。ですから、ある程度の距離になると近づきたいという欲求より離れたいという欲求の方が高まるわけです。このような葛藤を起こしやすい子どもたちは、フラストレーション、恐怖心、ないし不安感がとても強いのが特徴的です。こういう子どもたちと接していますと、われわれに接近してきたかと思うと、すぐに避けてしまったりするわけです。容易には関係が深まりません。接近してきたから、さあおいでと抱きかかえようとすると、子どもは嫌がるようにその場を避けて離れてしまうのです。このようなことを何度か経験すると私たちは、いい加減にして好きなようにしなさいと言いたくなって、突き放してしまうようになります。こうした悪循環が繰りかえされることになります。

III　具体的な事例から

1．A男の場合

現場で皆さんが接している人との関係を見た場合、これと同じような現象が多々起こっているのではないかと思うのです。でも今話したような分かりやすい行動様式ではなく、表現型が多少なりとも変化してしまいやすいので、この点が現場の皆さんにはわかりにくい点でもあります。そこでこれから具体的な事例を取り上げて話を進めていきたいと思います。

最初にA男さんについてお話しましょう。彼は現在成人期に達し、自閉症と診断されている人です。強度行動障害を合併しています。強度行動障害の中でも横綱級のケースです。いつも殺気立った雰囲気を感じさせ、みんな彼のそばに近づくと恐怖感に襲われていました。いつ彼にやられるかも知れないという恐怖心で戦々恐々としていました。実際、彼の破壊的行動は衝動的で、予測がつかないものでした。だからいつそうした行動が起こってもおかしくありません。したがって療育者（職員）はいつも彼の前では強い緊張を強いられていました。実は彼も同様に強い緊張感に満ち満ちていて、身体を固くし、ある時突然パニックを起こしていました。パニックを起こすと、その部屋の電球や壁、天井などを破壊すると同時に、そばにいた療育者にも破壊的な行動を向けるので、療育者もたまったものではありません。かみつかれたり、なぐられたり、蹴られたりします。さらに彼は自分に対しても自傷という破壊的行動をとります。

しばらく職員もどうしてよいかまったく途方にくれていました。彼らと私は何度となく討論を重ねていきました。すると職員の観察の中でとても重要なことに気づき始めました。彼がどういう時に自傷を起こすのか、職員の観察によって次第にある特徴があることに気づき始めました。例えば、食事の際に今からさあ食べようとした時、あるいは排便のためにトイレに入って便器に座った

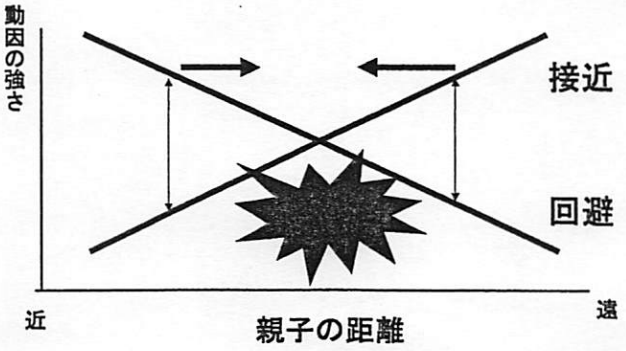

図1　接近・回避動因的葛藤（Richer, 1993）

時、さらには就寝時間になって職員が添い寝をして、電気を消して今から寝ようとした時などに起こることが分かってきたのです。

また、ある職員はこう言いました。その職員が他の利用者の世話をしたり、他の利用者に関心が移ってしまう時などに彼は自傷を起こすというのです。関心を誰かに向けるという行為は、相手の方に自分が近づく、接近していくということを意味しています。自分に関心を向けてほしいということは、相手との間で接近したいという気持ちの一つの表れです。彼は、誰かから常に関心を向けてもらいたい、という強い気持ちがあるのです。ですからその人が自分への関心を他に移してしまうということは、関心が薄れてしまう、すなわちその人が自分から離れて行ってしまうということを意味します。すると彼は自傷を起こしているのです。では職員が彼に対して濃密にケアをするようにしてスキンシップをとってやればよいかというとそうではないのです。入浴介助をその職員がしようとして彼の体に触れようとすると、彼は異常な身体の緊張状態を示していました。とても心地よい状態とは思えないのです。スキンシップをとるような密着した関係になろうとすると異常なほどの緊張と不安を示してしまうのです。いつも自分に関心を向けてほしいという欲求が非常に強い一方で、このように他者との密着した関係に対しては異常なほどの恐怖心を示していたのです。

このような状態が先ほど図示しました接近回避動因的葛藤状態の具体的な表現型のひとつなのです。葛藤状態というのは、誰かに近づきたい、誰かから離れたい、という双方の気持ちが共に非常に強い時、つまり拮抗した力関係にある状態のことを言います。双方の気持ちが共に強まり、拮抗状態になった時にどうにも動きが取れなくなってパニックを起こすわけです。図1の両者の線が交叉した状態がそれに該当します。彼らはこのような愛着をめぐる葛藤状態に陥りやすいのです。このような悪循環のために愛着関係が深まっていかないのです。

このような悪循環が生まれる大きな要因のひとつには、彼らの異常なほどの敏感さ、傷つきやすさ、不安の強さがあります。彼らは非常に過敏で、外界の刺激に対し圧倒されやすいところがあります。私たちは刺激に対してある程度選択しながら受け止めることができますが、彼らはそういうことがなかなかできません。乳児期の彼らをみますと、親の回想ではおとなしかったと言われている人がかなり多いのですが、おそらくそうではないのではないかと私は思います。彼らの乳児期はけっしておとなしかったのではなく、外界の刺激に圧倒されて、そのために身動きができにくかったのではないかと実際の乳児を診て思うのです。最近、私は乳児を直接診る機会が少なからずありまして、実感としてそのように感じるようになりました。おとなしかったといわれていた乳児でも実態はそうなのですから、いわんや非常に敏感であったといわれていた乳児、すなわち、抱っこやおんぶをしていないと寝なかったとか、寝たと思って布団をかけてやると途端に目を覚ますとか、抱こうとするとのけぞって嫌がるとか、抱いた時に丸太ん棒のような感じがしたとか、このように回想される乳児であれば、なおさら外界の刺激に対する非常な過敏さは容易に想像できましょう。これらの乳児に共通していえることは、刺激に対し異常なほどに過敏で、圧倒されたり、過敏に反応して拒否的行動をとったりしているのであろうということです。反応の違いはあるにしても、みんな異常なほどの過敏さを持っているということだろうと思うのです。そういう気質とか素質といったものを持って生まれた子どもが多いことは確かでしょう。それはある意味では将来的には個性ともいえるようなものを生み出すのでしょうが、彼らはそのような素質をもって生まれてきたと言ってもよいと思うのです。

ここで注意しなくてはならないのは、先に述べた接近回避動因的葛藤の悪循環はけっして子どもの側のそうした過敏さといった要因のみで起こるのではないということなのです。われわれの側にもこの悪循環をもたらしやすい要因を持ちやすいのです。この接近回避動因的葛藤の悪循環をどうしたらよいのでしょうか。この悪循環を断ち切らないと治療は前進しないのです。

2．B男の場合

そこでまた具体的なお話をしようと思います。次にお話するのはB男さんです。彼と出会ったのは2年前でした。B男さんは、A男さんと同様に、激しい自傷、他害、器物破壊の他に、睡眠障害、摂食障害などがありました。A男さんを強度行動障害の東の正横綱とするならば、西の正横綱といっていいほどの人でした。診断はやはり自閉症でした。

1歳過ぎから、すでに母親は彼の異常に気づいていました。2歳5か月頃から、手を噛む自傷行為の他に、多動、視線回避、ミニカーに没頭する執着的行動などが認められました。学童期には少し落ち着きを見せましたが、15歳から再び自傷が激しくなってきました。こうした経過の中で、ある施設で療育困難になり、現在の成人施設に処遇されることになったのです。

彼の入所時の状態で特徴的だったのは、彼の行動障害

とりわけ自傷が激しく、止まらないことでした。なぜそうなるかわかりません。それを防ぐために職員は自分の身体をはって止めようとするのですが、職員も時に骨折したり、あざを作ったりという状況になってしまうばかりでした。職員も手探り状態でどうしてよいやら強い戸惑いとともに、彼の激しい行動障害に圧倒され、なぜ彼が自傷するのか皆目見当のつかない状態が続きました。

しばらくたったある時、彼をある活動に誘ったら、まもなく激しい自傷を起こしました。あとから彼がテレビの前に立って職員に何か訴えようとしていました。その時、その職員は彼が見たいテレビ番組を見ている最中に活動に誘われたことが誘因だったことに気づかされたのです。このことが契機となって、私たちは当面彼の自傷がどのような誘因によって起こるのかを徹底して分析することに神経を集中させることにしました。療育方針として、①自傷行為の防止、②1対1での徹底した援助をするために、専任の職員をつけること、③彼の心の動きをよく観察して自傷の誘因となるものを明らかにすること、などを決めました。

すると1～2ヶ月もすると、職員も彼の気持ちの動きがよくわかるようになってきました。どんな時にどのような気持ちで行動しているのか、彼の動機や意図がわかるようになってきました。すると彼がどのような気持ちになった時に自傷を起こすか、その誘因が分かるようになってきたのです。好きな食べ物を要求する時などでした。このように彼の気持ちがわかってくると、担当職員にも心のゆとりが生まれるようになりました。そして彼の要求に的確に対応できるようになったのです。すると彼は食事時に食べることに集中できるようになるとともに、そんな時に彼は担当職員に何かと頼る仕草をとるようになってきたのです。時に彼が思うようにならない時に、自傷を起こしますと、担当職員はその時の彼の気持ちを察して、「そういうときは、○○○○て言うんだよ」と彼の気持ちを代弁しながらも彼に言葉で自分の気持ちを伝えるように援助していきました。

すると驚いたことに、まもなく彼は自分の意思を言葉で表現するようになってきました。具体的には、自分にとって嫌なことを強いられそうになった時にはっきりと言葉で「いやだ！」と言うようになってきました。それまで何かを欲しくなると、職員の都合に関係なく、強引に今すぐに買い物に連れて行くように要求していました。それが通らないと激しい自傷を起こしていたのです。しかし、言葉で自分の意思が相手に伝わることを体験したためでしょうか、職員がすぐに買い物に連れて行けず、他の日を約束すると、それまで待てるようになってきたのです。このことはそれまでの彼の行動からすると、大きな驚きでした。担当職員の喜びが大きかったのは当然でした。

入所後3ヶ月～5ヶ月頃になると、彼は担当職員に愛着行動を示し始めました。休憩時間に職員の膝枕で気持ちよさそうに眠るようになったのです。職員を頼り、安心して休むことができるようになりました。こんな甘える行動が出現し始めてからは、彼の方から職員につぎつぎに要求が出てきました。好きなCMの歌を歌ってと要求してくるようになりました。それに応えると彼は本当にうれしそうに喜び、つぎつぎに要求してきました。どんどん甘えるようになってきたのです。時に職員が忙しくて対応できない時には自傷を起こすことはあってもそれは少なくなっていきました。

まもなくとても興味深い現象が起こってきました。職員に甘える行動だろうと思えるのですが、わざとらしく担当職員の胸に向かって頭を打ち付けたりする行動を取り出したのです。職員はそれを受けながら彼がわざとらしくやっていることに気づき、それに応えて泣きまねをし始めました。すると彼は職員の反応をみてとてもうれしそうに笑って喜んだのです。そのような彼の行動を見て職員は彼をとてもかわいく思えるようになったと言います。彼の仕草に子どもらしいかわいさを職員は感じ始めたのです。彼の行動は、挑発行動としてとらえることができます。自閉症によくみられる行動障害のひとつです。挑発行動は、相手が嫌がることをわざと行う行動で、この行動のために対人関係が悪化することが大半です。しかし、彼と職員の間ではそうした関係の悪化は見られず、かえって関係はどんどん深まっていきました。食事の時にも全面介助をすることによって彼の食事時の自傷は消失していきました。こうして彼は担当職員との間でとても心地よい関係を体験するようになっていったのです。ただそのようになっていくにつれて、彼の職員への独占欲はどんどん強まっていきました。その職員が他の利用者に声を掛けたり、一瞬目を離したり、意識が他のことに移ると彼は途端に自傷するのでした。そのため職員は彼に全神経を集中しないといけなくなったのです。職員は彼の独占欲や甘えをしっかりと受け止めることに集中するように努めていきました。すると彼は自傷を起こしながらも、その職員の存在を意識しながら叩くようになりました。その職員が意識を彼に向けると自傷は治まるようになっていったのです。この段階で彼の自傷行為は、当初の不快感の表現行動であったのが、この時期には自分への関心を引きつける表現としての行動に、その意図が変化してきたのでした。私はこの段階の彼のこ

うした行動が職員との間であるサインの働きを持つようになってきたことに注目する必要があると思うのです。

彼の自傷行為が最初は不快の表現だったのですが、後に自分に関心を向けさせるための表現になってきたのです。その時職員は彼のその行動の背後にある意図を察知したのです。つまりは彼の仕草をある意味をもったサインとして感じとったわけです。この段階では職員と彼との間にしか通用しないサインだったのでしょう。自傷行為の中にわざとらしさを職員が感じ取り、その背後に甘えたいといった彼の気持ち、意図を察知したわけです。職員が彼の意図を感じ取ることができたことによって初めて彼の行動がサインとしての意味を持つようになったのです。ここにコミュニケーションの芽生えを見出すことができます。

私たちはコミュニケーションというと言葉を用いた形態をすぐに思い出しますが、コミュニケーションの初期の形態は身振りによるものです。養育者は乳児のしぐさに、ある意味を感じとって、乳児との間でコミュニケーションの形を知らず知らずのうちに作り上げていくようにもっていくのです。たとえば、乳児が目の前の物を握って私たちの前に突き出したとしましょう。最初から乳児は物を握って差し出す時に「どうぞこれあなたにあげる」といった意味を込めた身振りをしているわけではありません。乳児の仕草を受け取る側が乳児の仕草にある意味を感じとるわけです。私たちは「どうぞ」という意味を込めて差し出したと感じとる。すると私たちは「ありがとうね。お利口ちゃんね」と言いながら受け取ります。最初は乳児自身は決してあるサインとしてその仕草を用いているわけではないのですが、受け取る私たちが何らかのサインとして受けとめて応答しているのです。このように、養育者は乳児に接する際に最初から乳児の行動を感知する時に、必ずそこにコミュニケーションとしての意味を感じ取って応答しようとするのです。すなわち最初は養育者のこうした関与のあり方によってコミュニケーションの枠組みが作られていくのです。

先の彼と職員との間のコミュニケーションの形態もこれと同質のものを読み取る必要があります。つまり、職員は彼の行動の中に、わざとらしさ、すなわち相手をしてもらいたいという気持ちを感じ取って受け止めているのです。そして彼の行動に対して、職員は彼の気持ちに応えているのです。そうすることで、彼はなんらかの気持ちが通じ合ったという体験をするわけです。すると彼の行動は、自傷ではなく、もっとわざとらしく受入れられやすい仕草に変わっていっているのです。次第に彼の仕草が両者間のコミュニケーションのサインとなっていったのです。このような形態がコミュニケーションの初期の段階として非常に重要だと思うのです。

このように劇的な関係の変化が起こってからは、彼と職員の間で次第に遊びらしいやりとりが生まれてくるようになってきました。入所後5ヶ月～6ヶ月の頃でした。職員がCMソングの最初の部分を歌うと、彼が残りの部分に振りをつけて歌うというやりとりが生まれてきたのです。両者の間でのコミュニケーションにやりとりの構造をもつ遊びが芽生えてきたのです。さらに驚いたことには、他の生活場面で彼は職員の指示を驚くほど素直に聞き入れるようになりました。こうして職員への愛着行動はどんどん深まるとともに、職員の方も彼への愛おしさがどんどん募っていったのでした。

しかし、入所後7ヶ月してから、彼は毎週の帰宅の後に決まって激しい自傷を起こすようになってきたのです。週末帰宅後をこれまでとは違った激しい自傷が起こるようになったのです。その原因はすぐに分かりました。彼の母親はこの頃の彼の赤ん坊のような姿を見て、彼を容易にはそのまま受け止めることができないことが明らかになってきたのです。最初から母親の面接は定期的に私が担当していましたが、当時彼の母親は、「彼は今赤ん坊のようになっているのだから甘えさせてあげなければいけない、受け入れなければいけないと頭ではわかっているのにどうしてもできない」と語るのでした。実は母親のこのような心理的葛藤の背後には、自分の生い立ちを巡る深い葛藤が存在していました。すなわち、母親自身、幼児期に自分の両親との間で死別や別離の体験をし、現在もなおそうしたつらい体験を引きずっていることが面接の中で明らかになっていたのでした。この時母親は彼との間で愛着関係を持つことがとても困難な状態であったのです。

こうしてしばらく大変な時期がありましたが、まもなく彼の情緒的混乱が起こっても、職員がなだめると治まるようになっていきました。職員の両足に挟まってもたれかかり、居間の絨毯の上で職員の両手を握って眠ることができるまでになっていきました。カラオケで歌を楽しんだり、他の活動にも参加するようになっていきました。他の利用者が持っている玩具にも興味を示すようになっていきました。このようになってくると、容易には気分が崩れにくくなってきました。時に気分が崩れてもなだめるとすぐに治まるようになっていったのです。憂鬱そうにしていても職員と遊ぶことによって立ち直ることができるようになったのです。甘えたい時には、「あたまいたい、びょうき（頭痛い、病気）」と甘えた口調でやさしくしてほしいと訴えかけるようになりました。

以上がB男さんのこれまでの治療経過ですが、この経過をみると、自閉症の人にとって愛着関係がどういうふうに深まっていくのかということをよく分かっていただけるのではないかと思います。

Ⅳ　コミュニケーションを考える

1．コミュニケーションとは何か

なぜ自閉症の人々への援助を考える際に愛着というものを強調するのか、その理由を今からお話しようと思います。コミュニケーションがどういうふうにして深まっていくのか、成り立っていくのか、もっと平たく言えば、人間同士の関係というのはどういうふうに深まっていくのか、そして、その深まりの中で、自閉症の言葉や認知、そういう力が、その中でどういうふうにして育まれていくのかということを考えていこうと思うのです。時間が限られていますので十分なお話はできません。今日はそのさわりだけをお話しようと思います。

私たちは常日頃、自閉症の人々としっかりコミュニケーションを作っていきたいと願っています。良い関係をしっかりと作りたいと思っています。しかし、うまくいきません。そういう時にはまず出発点にもどる必要があります。ミュニケーションとはどういうものなのか。そして今の彼とのコミュニケーションは、どんな質なのか、どういうコミュニケーションの実態なのかを考える必要があります。

現在はインターネットに代表される情報化時代です。そのような時代ではコミュニケーションというのは、ついインターネットのような形態がもっとも発達した姿だと思い勝ちです。確かに一面ではそうです。しかし、インターネットのようなコミュニケーション形態が主流を占めていくようになりますと、人間のコミュニケーションの質はどんどんおかしくなっていく危険性があるということを念頭に入れておく必要があります。

そもそもコミュニケーションというのは、人間がふたり存在すると必ずそこに派生するものなのです。つまりふたりの人間がそこに存在すると、必ずそこでお互いに何らかの影響を受け合うようになります。いや私は影響を受けていませんと言っても、そのように意識すること自体が影響を受けている証でもあるわけです。逆説的な言い方ですけれども。必ず存在を意識させられます。いや私は気にしていませんという意識を持つことが気にしている証拠なのです。人間存在は必ず他者になんらかの影響を与える存在であり、かつ影響を受ける存在でもあるのです。つまりコミュニケーションの原型は、何らかの影響を双方が相手に与え合うということだといっていいでしょう。

2．コミュニケーションの構造を考える

つぎにコミュニケーションの形態は発達的にどのように変化していくのかを考えてみましょう。現在のインターネットの時代は情報のやりとりが大きな役割を果たす情報社会といわれています。情報が氾濫している世の中で、いかに生きた情報、自分達に役立つ情報を得るかということが、皆さんにとっても最大の関心事のひとつでしょう。コミュニケーションの上部構造、つまり非常に発達した一つの形態としてインターネットといったコミュニケーションの形態があります。つまりは情報のやりとりの最も分化した形態ということができましょう。情報伝達の効率性という意味では非常に高いものがあるわけです。同じようにファックスも優れた情報伝達の道具と言えましょう。私はファックスを使い始めてから、電話を使うことが非常に苦になってきました。そのため最近ではファックスばかりでやりとりするようになってしまいました。情報伝達ということに限っていえば非常に合理的で、電話ほどには相手にあまり迷惑をかけませんからとても都合がよいと思います。

しかしコミュニケーションの原点は、実はそんな世界ではないのです。先程の例でも示しましたように、ある気持ちが双方の間で共有される、分かち合うという世界なのです。このようなコミュニケーション形態を私たちは情動的コミュニケーションといっています。ある情動ないしは気持ちがお互いの間で共有されるという世界です。シェアーする、分かち合うということなのです。このようなコミュニケーション構造は図2のように示すことができます。

3．情動的コミュニケーションはどのような特徴をもつか

このファックスモデルとでもいえる象徴機能、すなわちシンボルを用いたコミュニケーションと、情動的コミュニケーションの一番大きな違いは何かと言いますと、前者は情報が一方から他方へやりとりされる世界ですが、後者すなわち情動的コミュニケーションの世界は、ちょうどふたつの音叉が共振するように両者の気持ちが振れ合うということだといわれています。気持ちが振れ合うという表現は実態をとてもよく言い当てていると思います。2つの音叉が共振する世界、つまり人間の心が音叉のように機能しているというわけです。振動数が同じだと共振するのですが、一方の振動数がゆるやかで、

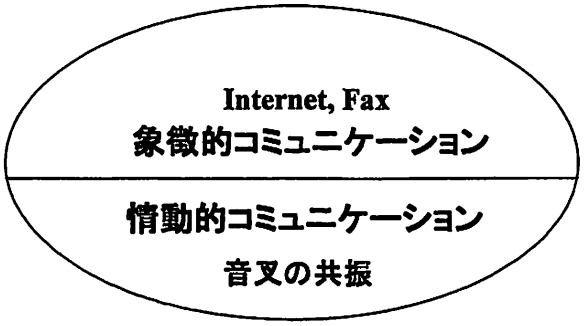

図2　コミュニケーションの二重構造（鯨岡）

もう一方のそれが早過ぎたりすると共振しないのです。

人間の心は相手の波長と共振するような音叉の働きを持っているのです。それは本能的なものでしょう。共振しない時はどんな時かと言えば、それは両者の波長が合わない時、ないしは自分の音叉を誰かかに触れられていてそのために振動しない時です。そのような状態では振動することができません。

情動が分かち合える世界ですと、相手の心の動きが容易に読み取れるようになります。こういう状態になるには雑念を払って全神経を相手の心に注ぐようにしなければなりません。そうすれば相手がどういう気持ちで行動を起したか、どういう要求、意図があったのか、こちらの心に相手の気持ちが振動として分かるようになるのです。

これが情動の世界の特徴なのですが、これは両者の心の間に、ある気持ちが共有されている状態なのです。このような世界は間主観性と呼ばれています。みなさんはこの言葉にあまり馴染がないかとも思いますが、今後の自閉症研究においてはもっとも重要な用語となると私は考えています。

このような情動的コミュニケーションは、両者間の愛着関係が深まっていかないと成立しないことは容易に想像できましょう。私が愛着関係を重視し、それを作っていくのが非常に大切だと言っているのはそのためなのです。コミュニケーション発達の最初の段階で不可欠な要素だからなのです。愛着というと、子どもを甘やかすことのように短絡的に連想してしまう人が自閉症療育関係者の中にも少なからずいることは非常に残念なことだといわなければなりません。

愛着の重要さを評価しない人たちの話を聞いているとある共通性を発見します。彼らに自閉症の人々の状態について報告をしてもらいます。すると愛着を評価しない人は必ずといっていいほど彼らの行動特徴を事細かく話します。そしてその行動特徴の大半にはネガティブな評価がつきまとっています。行動は実に客観的に緻密に観察できるのですが、子どもたちの気持ちや行動の背後にある動機や意図といった側面にはほとんど焦点が当てられていません。そのことに彼らが気づいていないこともありますが、そうした側面に焦点を当てること自体を非科学的だと感じ取っているきらいさえあります。このような傾向は今日非常に強まっているように思うのです。自閉症研究にそのような傾向を強く感じます。なぜこのような傾向を危惧するのかといえば、科学的という名のもとに、子どもたちの行動、すなわち客観的に評価できる側面ばかり観察しようとする態度は、子どもたちの心の動きを感じ取る感性を非常に鈍麻させます。そして問題となるのは、私たちは子どもたちの行動を見る時、無色透明の目では見ないことです。どういう目で見ているのかといいますと、これまで培ってきた価値観という色眼鏡で見てしまいがちなのです。つまり自分たちにとって好ましい行動、好ましくない行動、だめな行動、なくさなければいけない行動とかにどうしても振るい分けをしがちです。当然子どもたちは私たちのそうした見方、感じ方を感じ取っていきます。実は私たちの気持ちの持ち方が子どもたちとの間の情動的コミュニケーションに深く関わっていくから問題となるのです。

V　自閉症と情動的コミュニケーション

1．情動的コミュニケーションと無様式知覚

情動の世界で生きている時に、彼らの心はどのような働きをしているのでしょうか。もう少し分かりやすく言いますと、周りの世界を彼らはどのように知覚しているか、感じとっているかということを考えてみたいと思います。

彼らの知覚のあり様を知ることは実は非常に重要なことなのです。今日自閉症は言語認知障害を基底に持つといわれ、その基本に知覚障害が存在することを多くの学者は認めています。しかし、ここで彼らの知覚が障害されているといった捉え方をすると大きな間違いをもたら

す危険性があると私は考えています。自閉症の知覚の特徴について私はこの5年間あまり国内、国外で機会あるごとに報告してきましたのでご存知の方もあるかもしれません。自閉症の人々の知覚の有り様は私たちの平常の時のそれと質的にかなり異なっています。私たちの知覚現象は感覚器官によって司られています。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などです。目、耳、皮膚、舌、鼻と言う感覚器官を用いて知覚するわけです。物の形態を見る時には目を使います。話し言葉を聞き取る際には耳を使います。このようにそれぞれの刺激の特性によって異なった感覚器官を用いて知覚しています。このように感覚器官がどんどん分化し、人間らしい精神機能が発達していきます。人間が人間らしくなっていくプロセスの中で感覚器官の分化も同時平行して生じていくのではないでしょうか。その意味で知覚機能とコミュニケーション発達とは不即不離の関係にあります。自閉症の人の知覚のあり様を考える時にはそうした視点も必要だと思うのです。

2．力動感 vitality affect

さて少し分かりやすい話をしましょう。まずこの図(図3）を見て下さい。この図を見た時に何か動きを感じないでしょうか。単に大小の丸の図形をいくつか斜めに並べて描いただけの何の変哲もない図なのですが、私たちはこのような図を見るとそこになんらかの動きを感じ取ることができます。

つぎにこの図（図4）をみてもらいましょう。みなさんはこの図をみてあまり心地良い感覚は起こらないと思います。どこかとげとげしい感覚が内部に生じてきます。私たちの知覚の特徴には、さきほどお話した五つの感覚の他に、このような動きを感じ取る側面があります。このような知覚の特徴は無様式知覚と言われています。先の五つの感覚は分化し、ひとつひとつの様式（モード）に分かれていますが、そのような分化する以前の原始的な知覚と言われているものです。多様な刺激を包括的に捉え、動きやリズム、強弱といった特性でもって知覚すると考えられています。刺激を自分の身体でもって感じ取るわけです。外界の刺激の動きの輪郭が自分の身体を揺さぶり、引き起こされる情動的な体験なのです。このような知覚特性は力動感 vitality affect といわれています。

3．相貌的知覚

無様式知覚にはこのような動きを感じ取る力動感の他にもうひとつよく知られているものとして相貌的知覚という独特な知覚機能があります。

先日他のところで講演した時ですが、図（図5）のようにふたつの大きさの異なった林という文字を会場の皆さんにお見せして、どのような感じ方の違いがあるかを尋ねたのです。するとある人が、大きい「林」は林真須美容疑者（昨年和歌山県で起こったカレー毒殺事件の容疑者として逮捕された女性）のようだ、小さい「林」は林健治容疑者だと答えて下さいました。二人の関係を実に端的に表現した珍回答だと思って感心してしまいました。多くの人はこのような珍回答ではなく、恐らく大きい「林」の文字は力強く感じ取り、小さい「林」の文字は弱々しいといった感じ方をされると思います。単なる文字であるのに、力強いとか、弱々しいといった感じ方をするのは、そこになんらかの生命感を感じ取っているからなのです。力強いとか弱々しいといった表現は生き物にしか使わない表現ですから。このように生命を持たない対象物に対して、あたかも生き物であるかのように感じ取る知覚の特性が相貌的知覚といわれるものです。

4．無様式知覚は間主観的世界である

無様式知覚の世界の特徴をもう少し説明してみましょ

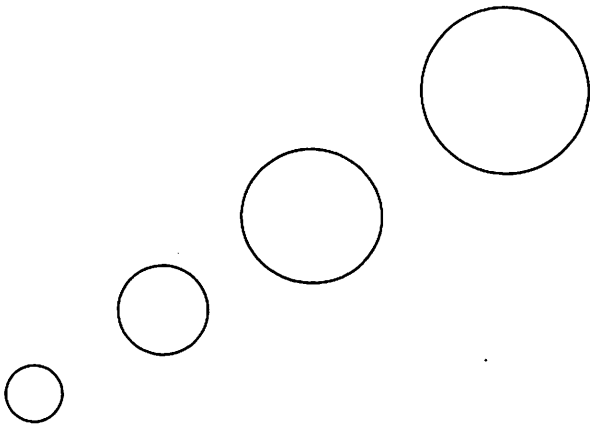

図3　力動感vitality affectの世界（その1）

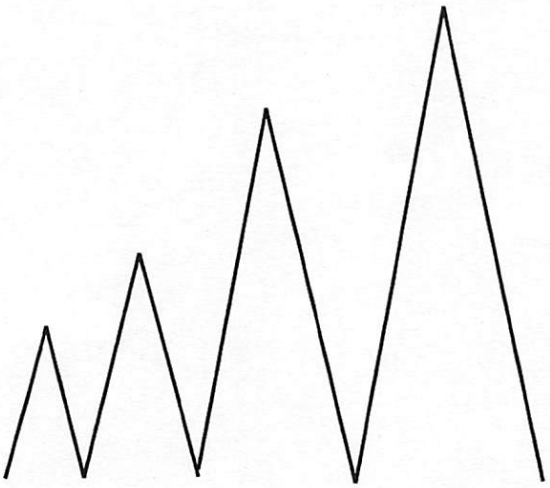

図4　力動感vitality affectの世界（その2）

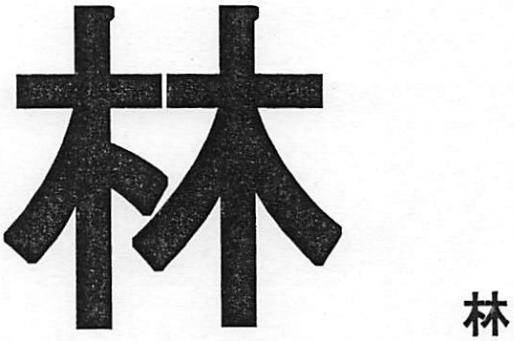

図5　送貌的知覚の世界
相

う。例えば今いる空間の照明がゆっくりと暗くなっていく場面を想像してください。好きなアイドル歌手の出場するコンサート会場だとします。そのような場面で会場の照明が落とされていくと、にわかに興奮が高まります。いまかいまかと期待感を膨らませて待っているため、会場の照明が暗くなっても不安な気持ちにはなりません。ところが突然なんの予告もなしに会場の照明が急に落ちてしまったらどうでしょう。ひどい恐怖心が引き起こされることでしょう。こちらの気持ちのあり方によって明かりの変化に対する感じ方も変化しますし、明かりの変化の違いによってもその感じ方が随分と異なってくるのです。

自宅で一人いて突然電話の音が鳴ったとしましょう。その時あなたが恋愛の真っ最中で好きな人といつもいたいという思いが強かったならば、その時の電話の音は好きな人のささやきにも似た心地よい響きを伴って聞こえ、思わず電話に飛びつきたくなるかもしれません。しかし、もしあなたがストーカーに付け狙われていたとします。そんな心理状態の時に電話が突然鳴ったとしたら、恐らく電話の音はあなたにとって突然侵入者が現れたかのような恐怖心に襲われてしまうかもしれません。その時の主体の心理状態によって知覚のあり方は容易に変化してしまうものなのです。さらにはその心理状態の違いによって、刺激が自分にとって生き生きとした生命感を抱かせたり、時には恐怖に満ちた侵入者のようにも感じてしまうものなのです。このような特徴が無様式知覚の世界だと思うのです。知覚現象はこのように間主観的な性質を持っているものなのです。

では言葉の意味の世界で他者とともに生きることが困難な自閉症の人々にとって、私たちの発する言葉がどのような意味を持っているのでしょうか。無様式知覚優位な世界で生きている彼らにとって、私たちの言葉、特に話し言葉の世界は、まったく無意味なものとして受け止められているのではないのです。言葉という刺激のもつ力動感に非常に敏感に反応しているのではないかと思うのです。言葉が醸し出す力強さ、弱々しさ、とげとげしさといった力動感に恐らく異常なほどに敏感に反応している側面を見落としてはならないと思うのです。それが無様式知覚の世界なのです。

5．自閉症と無様式知覚の世界

自閉症の人々は先ほどお話したように、他者とのあい

だで愛着関係を持つことに非常に困難さを持っています。そのためいつも他者の存在によって安心感を抱くことが困難なのです。つまりはいつも強い不安感に包まれていると思っていいでしょう。そうした心理状態にあって、無様式知覚の世界で生きていたならば、先ほど例に挙げたようなストーカーに付け狙われている心理状態での世界とよく似ているかもしれません。外界の刺激が彼らにとってはインベーダーのように侵入的な色彩を帯びやすいといえないでしょうか。

図示するとちょうど図6のような状態といっていいかもしれません。心の大きさを円で示したとすると、自閉症の人々の心はこのように小さく萎縮していましょうから、外界からの刺激は彼らの心には圧倒するような強さをもって迫ってくることになるでしょう。刺激が洪水の如く流れ込んでいく状態と言えるかもしれません。迫害不安といっていい心理状態でしょう。

しかし、幸いなことに自閉症の人々が常にこのような迫害的な心理状態にのみなっているかといえばそうではないのです。無様式知覚の世界では些細な刺激が彼らにとって実に生き生きとした快的な色彩を帯びたものに映ることも少なくありません。ベストセラーになったドナ・ウィリアムズの自伝の冒頭に「空中にただよっているホコリやチリが光にあたってキラキラ輝いて舞っている。その世界にうっとりしている」といったことを述べている個所があります。これなどはまさにそのような世界の特徴を指していると思うのです。このような状態では彼らの心的状態は図7に示すようなものではないでしょうか。

B男さんの治療の中で職員の人たちが彼との関係づくりを心がける中で、ある時期になると言葉を遊び道具の

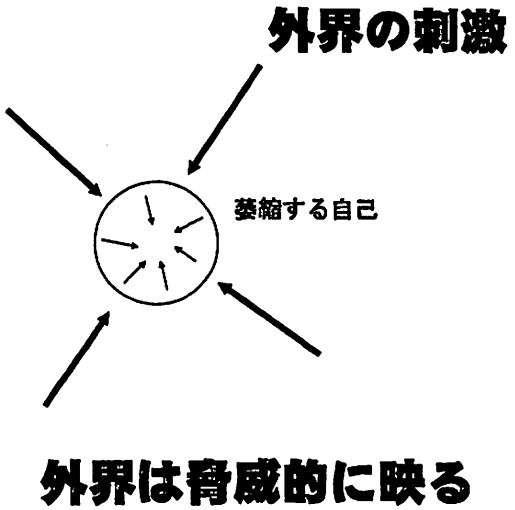

図6　迫害不安の強い心理状態での外的刺激

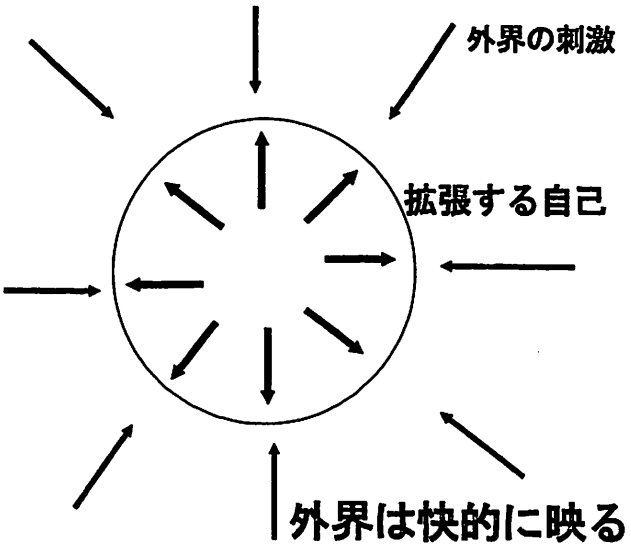

図7　快的な心理状態での外的刺激

ようにして用いるやりとりをしていました。恐らく職員の人たちはさほど意識してそのような遊びを行ってはいなかったと思うのですが、言葉のもつリズムや強弱といった要素を大切にしながら彼との間で言葉遊びを行うように工夫する時期が訪れました。これなどはまさに言葉のもつ力動感を大切にした働きかけということができましょう。情動的コミュニケーションの世界でこのような治療的接近は非常に重要な役割を果たしています。職員との間で良好な情動調律が生まれ、両者の間でハーモニーが奏でられている世界といっていいでしょう。

Ⅵ　自閉症とコミュニケーション発達援助

今日は愛着を深めるということがコミュニケーションの基盤を作っていく上でとても重要だというお話をしました。そしてもう一つはコミュニケーションの基盤は情動の世界であり、情動の世界はどのような特徴をもつかについてもお話してきました。

最後に情動的コミュニケーションはどのようにして深まっていくかをお話して終わりにしたいと思います。まず最初の段階では、養育者ないしは私たち療育者が今の子どもの気持ちを身体でもって感じ取り、分かち合うということが必要になります。この段階では養育者ないし療育者の積極的な関与が重要になります。このような関係を幾度となく蓄積していくにつれ、次第に子ども自身もこちらの気持ちを感じ取ることができるようになり、両者間である気持ちや情動が分かち合える関係へと深まっていきます。このようになっていくと、こちらは子どもの現在の気持ちや意図が即座に感知できるようになっていくものです。子どもが今どのような気持ちで何をしようとしているのか、何をしたいと感じているのかが分かるようになるのです。ここでも最初の段階ではこちらの積極的な関与が重要になってきます。しかし、しばらくすると、子ども自身もこちらの意図（子どもにどんなことを期待しているのかといったこと）を察知できるようになってくるものです。こうして両者間で意図が分かち合える関係へと深化していきます。このような関係になりますと、養育者や療育者は暗黙のうちに子どもの行動に実に的確になんらかの働きかけをしているものなのです。言葉を発することもそのうちの大きな部分を占めます。子どもの今行っている行動にぴったりとくる言葉をこちらが発しているために、子どもはそこで生きた言葉を体得していくことになるのです。そこでは子どもとの間で様々な体験が共有されながら、こちらは暗黙のうちに言葉を発したりして働きかけをしているのです。恐らくはこのような関係の中で子どもは知らず知らずのうちに多くのことを養育者から学んでいくのでしょう。このようなコミュニケーションの深まる過程は図８のように示すことができましょう。

先に具体例としてお話したＢ男さんのように職員がコマーシャルの歌を歌い、途中からそれとなく彼について歌ってもらおうとすると、彼はこちらの意図を察知して歌い返すようになっているのです。最初は職員の側から彼らに接近して気持ちを分かち合えるように努力していかざるを得ないのですが、次第に今度は彼らの側からわれわれの方に接近しようとする兆しが見えてくるものなのです。

Ⅶ　おわりに

本日は自閉症の人々にみられる愛着行動の特徴を説明し、彼らと私たちが愛着関係を持てるようにすることがなにより先決であること、すると彼らとの間でのコミュニケーションは次第に深まっていくことを具体例を交えながら説明しました。

時間の関係から、自閉症の人々にみられる自傷行為のメカニズムについては省略せざるを得ませんでした。さらにコミュニケーションが情動水準から象徴水準へと進

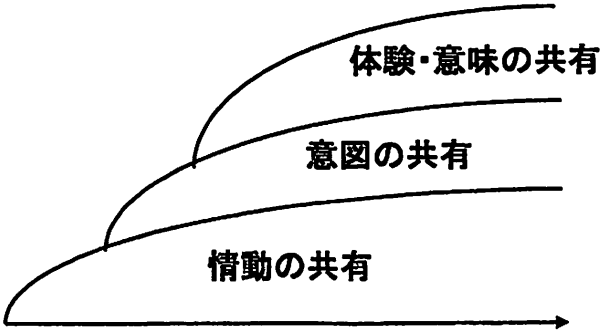

図８　情動的コミュニケーションの進展過程

展していく過程でどのようなことが起こるのか、自閉症の言語認知発達の問題はコミュニケーション発達の視点からみるとどのように考えられるのか、など大きな問題についてはまた別の機会にゆずりたいと思います。

愛着行動に焦点を当てた自閉症のコミュニケーション発達援助についての私の話が皆様の今後の療育を考える際に何らかのヒントにでもなれば幸いです、ご清聴ありがとうございました。

本稿は、静岡県知的障害者愛護協会主催の平成10年度入所更生施設部会職員研修会（1998.11.20.伊東市）における特別講演の内容に若干の加筆修正を行い改題したものです。この講演の機会を与えて下さいました関係諸氏に厚くお礼申し上げます。

本稿の元となった研究は、富士記念財団と三菱財団の助成を受けて実施されたものです。両財団に厚くお礼申し上げます。

本研究の遂行に際して社会福祉法人嬉泉袖ケ浦のびろ学園および社会福祉法人ふじの郷さつき学園（静岡県御殿場市）の職員の多大なご協力をいただきました。ここに改めて厚くお礼申し上げます。

参考文献

Bowlby, J. (1988). A security base: Parent-child attachment and healthy human development. New York, Basic Books.

小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香(1997). 乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象. 乳幼児医学・心理学研究, 6, 9-27.

小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香 (1997). 東海大学健康科学部における Mother-Infant Unit の活動紹介. 乳幼児医学・心理学研究, 6, 31-43.

Kobayashi, R. (1996). Physiognomic perception in autism. Journal of Autism and Developmental Disorders, 26, 661-667.

Kobayashi, R. (1998). Perception metamorphosis phenomenon in autism. Psychiatry and Clinical Neurosciences. 52, (611-620)

小林隆児(1999). 自閉症の発達精神病理と治療. 東京, 岩崎学術出版社.

鯨岡峻(1997). 原初的コミュニケーションの諸相. 京都, ミネルヴァ書房.

Richer, J. M. (1993). Avoidance behavior, attachment and motivational conflict. Early Child Development and Care, 96, 7-18.